

『宮城県を元気にする高知応援隊』に参加して

(株)第一コンサルタンツ 調査二課 原田基永

【はじめに】

今回、この高知応援隊（以下応援隊）に参加するにあたり、私は副隊長補佐という実行委員としての参加であった。副の補佐という微妙な肩書きではあったが、この応援隊は肩書きにとられないメンバーで作上げた団体であった。下写真が今回参加した我社のメンバーである。社長以下14名での参加であった。



【6月16日（木）：雨】

11:00 この日は雨。宮城県に寄贈する乗用車2台を我社の6人で陸送するにあたり、当社駐車場にて車両出発式を行い、社員の方々にも参加いただき陸送部隊を見送った。「安全運転よろしく」



この日は22時過ぎまで2時間間隔で、酒井車両班長から無事の連絡をもらう。

【6月17日（金）高知：雨 仙台：曇り】

6:10 高知龍馬空港に到着し、出発式に備える。

6:45 出発式ではテレビ局3社、新聞社等が取材にきており、午後のニュースで紹介されるのかな、と気になりつつ実行委員としての仕事に追われていた。出発式の様子は高知新聞の夕刊に載っていたとおりであり、私は背中のみ出演となった。

10:30 東京羽田空港到着後、モノレールに乗り浜松町、山手線にて東京駅に入る。そこで東京からの参加者数名と合流し、東北新幹線にて仙台へと出発。



13:30 仙台では先発隊と我社の車両陸送部隊と合流し、全員の無事を確認する。昨

日顔を合わせたメンバーではあるが、仙台という遠い地での再会に気持ちが少し和んだものだった。このとき高知応援隊のメンバーが初めて全員揃ったのである。

ここからはバスにて被災地の視察である。多賀城市、仙台港、七ヶ浜から活動拠点である「松島野外活動センター」に入る行程だ。

14:00 多賀城市。バスから被災状況を視察しただけでも津波の被害はあちこち



らに見られる。この時は「明日からもっとすごいところを見るのだろう」と思いカメラのシャッターを切らなかった。だが、二日後この地に我々の心が打たれることになることは、この時は知る余地もなかった。

14:20 仙台港。ここまでの道中でも被災状況はかなりのものである。仙台港には苫小牧～仙台の大型フェリーが停泊していた。バスの運転手によると、その大型フェリーが大きく傾き、倒れそうになっていたらしい。



15:20 七ヶ浜に着いた。ここではバスから降りて視察をした。目の当たりにしたら言

葉を失う。基礎ごと流された家、基礎の下が陥没して穴が開いている家、原型は残っているが中がぐちゃぐちゃの家など、ものすごい光景が目の前に広がった。海水浴場のほうも、数年は海水浴が出来ないだろうと思われる光景だ。



16:30 この日の最終目的地である宿舎の「松島野外活動センター」に到着。が、明日の予定について突然の変更が出る。私の行く南三陸町班の炊き出しだ。志津川中学校（100食分）から志津川高校（30食分）への場所の変更だ。それだけではない。お昼に別の2箇所に対してそれぞれ150食と70食を追加で配達しなければならない。志津川高校での提供は30食分であるため問題はないが、それ以外に220食分を配達となると、運搬車両、運搬人員等すべてが白紙のままである。18時半までに決断を迫られ、三谷班長他役員で話し合ったが結論が出ない。決断の時間が迫る中、我々は「よし、やってやろう！」という意地ですべての提供を引き受け、それから段取りを考えることにした。懇親会も上の空で、会終了後から深夜までミーティング。

「これならなんとか出せる」という方法を皆で考え出したが失敗は許されないので、徹夜を覚悟して炊飯の練習をすることにし

た。床についたのは深夜の2時過ぎ。なんとか徹夜は免れた。もちろんシャワーなんか浴びてない。



【6月18日（土）：晴】

5:00 起床。勝負の日。先発隊の我々は6時出発である。ほとんど寝ていない。乗用車3台に分乗し南三陸町志津川を目指す。睡眠不足か昨夜の酒か分からないが気持ち悪い。正直、志津川高校までの道中を覚えていない。気づいたら志津川高校への上り坂であった。

7:30 到着。まず避難所の責任者に挨拶を兼ねて当日の段取りを聞く。そこでもまたまた変更。30食と聞いていたこの避難所の食数が120食要することが判明。用意している数量を少しオーバーしている。が、もうやるしかない。

ここで朗報。12時に届ける予定の70食分が夕刻まででよい、との連絡が入り隊員に少しの余裕がでる。

8:00 設営。事前に決めておいた調理班、設営班はもうない。昨夜の打合せ通り、全員で設営し、全員で調理をするのである。この班の実行委員3人で26人の南三陸班

を仕切るのは容易なことではない。なにせ昨日初めて会った人たちだから。



9:10 失敗が許されないなか設営が完了し、次は調理。まずは炊飯だ。この隊員の中には料理のプロなんて一人もいない。昨夜一度失敗した教訓か、本番は完璧に3回とも大成功。

ご飯ができればあとは食材の調理である。メニューは『土佐あかうしカレーライス』『高知の新鮮野菜ミネストローネスープ』『鶏の唐揚げ』そして『ナスのタタキ』だ。

11:30 150食分を配達出来る形にしなければならなかったが、ここでも皆が一致団結し、すべてのメニューを150食分揃えることができた。ほぼ完璧である。時間通りそれらを大久保民家という施設に無事に搬送。



時間を置かず、ここ志津川高校避難所での120食分の調理に取りかかる。この時すでに隊員は勢いの波に乗っていた。さあ12時が近くなってきた。いつでも提供できる状態だ。

12:00 炊き出し提供スタート！ いよいよ始まった！ 避難施設である柔道場から、少しずつ避難所の方たちが集まってくる。我々こちら側は避難所の人たちがどんな反応をするのか不安でたまらない。メニュー以外にも徳谷トマトとリープルも差し上げ



た。皆が「ありがとう」の言葉をかけてくれる。なんだかこみ上げてくるものがあり、涙が出そうになる。高齢者、子供、他のボランティアの方々、たまたまその日に民謡を披露しに訪れていた方々にも振る舞う。皆「ありがとう」って言ってくれるが味が不安である。高齢の女性の方に聞いてみた。



「ほんと美味しいですよ。特にトマトとナスが美味しい。そしてこのリープルという飲み物も最高」と言って頂いた。味の感想と合わせて被災時の状況もお聞きした。もう涙が止まらない。その横では無邪気に遊ぶ子供の姿。また涙があふれてくる。そうやって避難者の方々とお話させていただいて回ったものだった。



13:00 炊き出し終了！大成功である。夕べの、深夜にもおよぶミーティングで、すべてにおいて最悪のケースを想定して準備した甲斐があった。馬場中山センターに搬送する70食分も量的には十分の余裕がある。13時過ぎ、3名の隊員で搬送開始。そこへは片道30分ほどかかる道のりではあるが、14時半には無事に帰ってきた。

13:40 隊員全員で後片付け。皆の顔に充実感がうかがえる。私は放心に近い状態だったのか、正直言ってその時の状況をあまり覚えていない。

14:30 体操教室、よさこい鳴子踊り。この時にやっと正気になったような気がする。体操教室やよさこい鳴子踊りでは高齢の方々と一緒に笑顔で体を動かし、笑顔で踊った。40年以上生きてきた中で初めて感

じる充実感である。これは言葉では言い表せない。最後に施設の方々、ボランティアの方々との記念撮影をした。迎いのバスを待つしばしの時間、地元の方たちと色々な話をした。聞けば聞く程ため息が出て言葉に詰まる。でもここでしか聞けない大変貴重な話だった。



16:00 皆に見送られながら志津川高校をあとにする。このとき初めて志津川地区の被災状況を目にした。このときもため息しか出てこない。先程聞いた話がもう一度思い出されて涙がこみ上げてくる。バスに揺られて被災地域を過ぎたら、いつの間にか意識が遠のく。

【6月19日(日):晴】

6:00 起床。朝食をとって7時半頃から高知応援隊の解散式だ。

7:30 解散式。隊長の挨拶などセレモニーが終わったところで私に一本締めのお誘いが。快く引き受けて思いっきり『パンッ!』。気持ちよく締めることができた。本隊はこの日で解散だが、帰高する班、現地ボランティア活動をする班、被災状況を調査する班に分かれての行動となる。私はボランティ

ア班の責任者という立場で多賀城市へ。総勢17名。



8:00 解散式を終え、お世話になった宿泊施設の方々と記念撮影をしたり、ここで別れる隊員たちと再会を約束したりしながら移動の支度を進める。タクシー数台に分乗し多賀城市役所に向かう。タクシーの運転手から沿線の被災状況を聞いた。津波の被害、地震の被害、その時の経験などいろいろ…。ここでもため息とともに涙がこみ上げてくる。



8:40 多賀城市役所に到着。9時から市役所の隣にある多賀城市ボランティアセンターにて受付を済ませたあと、センター2階で説明を受け、並んだ順番に活動の地へ送り出される。我々は22名で大代公民館という施設へ体育館の清掃に向かうことにな

った。その22名のうち、我社のメンバー7名と東京から応援隊に参加している2名以外は初対面の面々である。そこでもなぜか私はリーダーを任されることになった。



9:30 大代公民館体育館に到着。被災状況がどの程度なのか分からず不安が広がる。中を見る。体育館のフロアは津波による下からの水圧で大きくめくれ上がっている。フロア面は波打っていて泥水で洗ったように真っ白。そこにテーブルが30個ほどあり、テーブルの上には漂流したと思われる結婚写真やお見合い写真、遺影の写真、アルバム等が山積みになっている。中には仏壇や優勝カップもある。すべてが泥だらけだ。係の方から掃除の説明をうけメンバーに伝達。いよいよボランティアスタートだ。



9:45 まず2箇所からホースで水をかけ、10名がデッキブラシでフロアを磨き、10名がゴムワイパーで水をかき出す、という作業を高い所から低い所へ向かって進める。皆がいっせいに取りかかる。この一体感は何だろう。昨日の炊き出しの時も感じたが、見ず知らずの人間がものすごい一体感を出す。これがボランティア精神なのか。そんなこんな考えていると1時間ほどで清掃終了。これもすごい。



10:50 センターに連絡し、迎えに来てもらい、メンバーを次々にセンターに帰す。我社のメンバー7名は最後の便で帰ることとして、少しの休息をとった。その間にテーブルの上のアルバム類を見た。もちろん中身までは見なかったが、「このアルバムの持ち主は今どうしているのだろう」とか考えていると涙があふれてくる。

そうこうしていると迎えの車がやってきたのでセンターに向かう。正直、このままではボランティアをやった感があまりない。作業服も全然汚れていない。

12:00 食事を済ませセンターで待っていると、別の箇所へ行っていた我社のメンバーが帰ってきた。そちらは床下に溜まった汚泥の搬出だったらしく、かなりヘトヘトになっていた。作業服の汚れ具合も我々とは違う。少し気が引ける。

12:10 そこへ民家の瓦礫撤去作業を行っ

ている所から追加応援要請。追加は5名と
いうことだったが、そのとき我社のメンバ
ー10名全員が揃っていたので「10名で
はダメか」とお願いすると「OK」の返事。
まさに緊急出動だ。午前中は上履きだっ
たのを安全靴に履き替えた。



12:20 向かう場所は多賀城市宮内地区。こ
のあたりの津波の高さは1階建ての天井程
あり、多賀城市内でも最も被害が大きか
った地域らしい。車が港に近づくにつれ景色
が様変わりしていく。倉庫は足下をすくわ
れたようにボロボロ。住宅はほとんどが取
り壊されている。残る住宅も人が住んでい
る気配はない。まさにゴーストタウン。こ
こでもため息しか出ない。

12:30 個人宅に到着。お昼休みでボランテ
ィアの方々は休憩中だ。作業はかなり進ん
でいると思われる状態。しかし、当日中に
終了するには人手不足なので我々が呼ばれ
たのである。そこのリーダーから説明を聞
く。我々の任務は台所の瓦礫撤去と全体の
瓦礫運搬だ。役割を決め、いつでも開始出
来る体制を整える。私の役割は瓦礫運搬だ。

12:45 作業開始！ それはもう言葉には
出来ない状況である。家の中に土、ごみ、

瓦礫、衣類、木材、なんでもある。こんな
光景を見たことがあつたらうか。手当た
り次第ゴミを分ける。土は土のう袋、ゴミ
はゴミ袋、ガラス類はガラス類、どんど
分けられていく。それがどんどん家の中か
ら出され、ネコ車で集積場所まで運ぶ。半
端じゃない量と種類だ。ネコ車3台はフル
回転。もともと瓦礫の山だった集積場所が
もう一つの瓦礫の山を作る。震災から3ヶ
月以上もたっているのに、まだこんな状態
の家が残っているのである。ここでもボラ
ンティアメンバーたちの抜群のチームワー
クに驚かされた。

13:40 作業はほぼ終了。あとは住宅周辺に
落ちていたガラス片などの小さなゴミ等を
拾った。そのとき初めて、その家の周辺を
ゆっくり見た。周辺というよりも隣の家だ。
まだ手つかず状態のその家は、窓のサッシ
は大きく曲がりガラスは割れて無く、家
の中はまさに瓦礫のたまり場だ。この家だけ
のものとは思えないゴミの量。部屋にはハ
ンガーに掛けられた服が被災時のままある。
とても現実とは思えない光景だ。さっきま
で作業していた家もおそらくこんな状態だ
つたのだろう。ここでも言葉が見つからず、
ため息しか出てこない。

15:00 作業終了してセンターに戻る。ここ
でリーダーや他のメンバーたちと記念撮影
をし、多賀城市をあとにした。

この多賀城市では、言葉では言い表すこ
との出来ない程の経験をさせてもらった。
被災状況を間近で見、瓦礫に触れ、被災者
と話しをし、日常生活ではとても考えられ
ないことをたくさん経験した。そしてボラ

ンティアというパワーの凄さを肌で感じる
ことができた。民家の瓦礫撤去の様子を写
真に納めることが出来なかったのが残念で
はあるが、それは「個人の住宅だから撮影
は遠慮して頂きたい」との要請があったか
らである。

16:00 仙台市内のホテルにチェックイン。
久しぶりに一人の時間を満喫しながら、風
呂にゆっくりつかった。



【6月20日（月）：晴】

8:00 最終日。出発まで時間ができたため、
我社のボランティアメンバー10名全員で
松島観光へ向かう。

10:00 松島観光遊覧船に乗船。それぞれの
任務を果たした達成感からか、皆の顔から
緊張感が消えていた。普段の顔に戻ってい
る。終始リラックスムードのなか遊覧船に
て海からの松島観光を楽しむ。昨日まで時
間の流れが速かったせいか、こののんびり
した空気に少し現実に引き戻された感じが
する。

14:34 新幹線（やまびこ258号）で思い
出の宮城県（仙台）を後にする。東京へと

向かい、往路とは逆の行程での帰高となる。



【自身の感想】

『我々が被災地宮城県で見聞したこと、
体験・体感したことを、今後起こりうる南
海地震に生かさなければならぬ。そして
語り継いでいかなければならぬ。』と強く
思った。ある被災者の方が言っていた『私
たちは生きる為選ばれたのだ。だから後
世に語り継ぎ、そして助けてあげなければ
ならぬ。』という言葉が頭から離れない。
それと、『一度逃げたら引き返すな』、『食料
よりも飲み水』という言葉は避難するとき
の教訓として深く心に刻まれた。

我々はこの応援隊での経験を必ずこの高
知で生かすつもりだ。

そしてもう一つ。この応援隊もそうだが、
現地ボランティアの方々の若さ、というこ
とに喜びに似たものを感じた。この若いエ
ネルギーはもの凄いパワーがあった。その
エネルギーのお陰もあって、すべてが大成
功したのだと思う。私はこの応援隊に参加
して心から本当によかったと思う。御協力
していただいた皆様、ありがとうございます。

最後に伊藤君、4日間の「下っぱ活動」
ご苦労様でした。